

今日の説教のポイント<マタイによる福音書 22 章 15～22 節>

①ヘロデ派がファリサイ派と組む？ 敵の敵は味方？！

ヘロデ派とはローマ帝国に仕えた領主ヘロデにつく人々のことで、信仰熱心なファリサイ派の人々が彼らと組むことは普通は考えられないことでした。だのに組んだ理由は唯一つ、どちらもイエス様を憎んでいたからです。「敵の敵は味方」ということでしょうか？ 彼らがしたこと、の意地の悪さにあきれ果てますが、聖書に出て来る人間は全て私たちの代表であり、私たち自身の中にも潜んでいる姿である点に注意です。

②彼らの問いとイエス様の答の違い — 二者択一かどうか。

彼らはイエス様に「ローマに税金を納めていいか、悪いか。AかB、そのどちらだ」と二者択一を迫りました。しかし、イエス様は彼らにローマに税金として納める銀貨を持って来させられました。それには皇帝の肖像と銘が刻まれていました。つまり、もうずっと彼らはそれを使い続けてきており、答を求めるまでもなかったのです。そして「**皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい**」(21)と、AでもBでもない第三の答を示されたのです。ここから何が聞き取れるのでしょうか？

③神と皇帝がそれぞれ支配する二つの領域があるわけではない！

まず言えること。イエス様は、現にローマに支配されている中を生きている人々に酷な要求、「異教の皇帝に税金を納めてはならない」と命ぜられるようなお方ではなかった、ということ。しかし次に言えること。

「**皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい**」の意味は、神様に仕える領域と皇帝に仕える領域の二つあるということではありません。なぜなら、皇帝もまた神様の下に仕える存在であり、皇帝が謙虚に神様と民に仕えるなら、その時、皇帝に返すものは結局神様に返されているからです。しかし、いつの時代もそんな良い為政者ばかりではありませんでした。そんな時には、信仰者は本来あるべき方向、つまり、神様が望まれている方向であると共に人も幸福になる方向に向けて、できるだけのことに取り組んできました（ナチスに抗した『バルメン宣言』）。